

《2018年10月（通算266回）月例会報告》

文京ラグビースクールにおける学び —ラグビースクールが果たすべき役割—

齋藤 守弘（日本ラグビーフットボール協会企画部担当部長
／文京ラグビースクール校長）

【日時】2018年10月24日（水）19：10～21：30（終了後は「景宜軒」。閉店まで盛り上がる）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】文京ラグビースクールにおける学び —ラグビースクールが果たすべき役割—

【演者】齋藤 守弘（日本ラグビーフットボール協会 企画部 担当部長
／文京ラグビースクール 校長）

【コーディネーター】嶋崎 雅規（国際武道大学）

【参加者（会員・メンバー）8名】

小池靖（在さいたま市/サッカースポーツ少年団指導者）、小山基彰（部活動応援プロジェクト YELL 代表）、嶋崎雅規（国際武道大学）、張寿山（明治大学）、名方幸彦（文京教育トラスト）、中塚義実（筑波大学附属高校）、皆川宥子（東京大学大学院）、守屋俊英（世田谷サッカー協会）

【参加者（未会員）2名】

齋藤守弘（日本ラグビー協会）、守屋佐栄

【報告書作成者】名方幸彦（文京教育トラスト）

【目次】

1. 自己紹介
2. 文京ラグビースクール設立の経緯と現状
3. 文京ラグビースクールの運営
4. 今後の課題
5. 質疑応答

嶋崎：私は平尾選手と同じ世代です。ラグビー全盛期で育ちましたので、前回のワールドカップで日本代表が活躍してラグビーが盛り上がるかと思いましたが、実際はそうでもなかったです。ただし例外としては、全国でラグビースクールが広がりました。それが中学生・高校生に波及してくると思います。そこで本日は文京ラグビースクールのケースを聞きたいと思います。齋藤さんよろしくをお願いします。

1. 自己紹介

齋藤：このような機会をいただいたきありがとうございます

まず簡単に自己紹介をさせていただき、次に文京ラグビースクールでどんなことをやってきたか。次に私が思っているラグビーについてお話する予定です。

私は今年還暦を迎えました。実家は文京区白山で、フレッシュネスバーガーが1階に入っているビルです。文京区に生まれて指ヶ谷小、文京六中、小石川高校、東大と文京区で育ってきました。ラグビーは小石川高校で始めてから東大そして1982年に日本IBMに入って現在まで45年間にわたってラグビーと関わってきました。去年60歳を1年前にして日本IBMを退職し日本ラグビー協会に転職しました。日本IBMで、福山に駐在した時に福山市にある県立誠志館高校のラグビー部のコーチをしてきた関係もあり今年文京区と福山市が姉妹都市になったので、いつか福山ラグビースクールと文京ラグビースクールの交流戦などを企画したいと思っています。

2. 文京ラグビースクール設立の経緯と現状

齋藤：文京ラグビースクールを始めた動機からお話しします。東大ラグビー部の指導を1997～2011年までしてきましたが(1998～2003年は監督)、次になにかをやりたいという漠然とした気持ちを持っていました。そうしているうちにサロンのメンバーでもある文京教育トラストの代表の名方さんと、息子さんが小石川高校でラグビーをしていたことで知り合い、ラグビースクールを作ろうと話していました。当時の最大の課題は、グラウンドの確保でした。その時にたまたま、中塚先生から山田先生を紹介してもらいました。そこで筑波大附属高校に挨拶に伺った際に、山田先生が「私も東大1年のときにラグビー部に所属していた」という話を聞いて、それからとんとん拍子に話が進んだ次第です。

現在東京にラグビースクールは23ありますが、文京ラグビースクールは22番目です。ラグビースクールはサッカーと異なり、どの区でも区の一つずつしかありません。たとえば世田谷区には世田谷区ラグビースクールがあります。23区すべてにあるわけではなく山手線内ではみなとラグビースクールが初めてで、文京ラグビースクールは2番目です。

自分がラグビースクールを立ち上げたときに考えたことは、「ラグビーをする場づくり」です。できるだけ、シンプルにしたいと思いました。ラグビーを教えるのではなく、ラグビーを通じて教育がしたいと思いました。日曜日の午前中にのんびりとするのも悪くはないですが、早起きしてグラウンドに行く、子供たちにそういう時間を提供できればと思いました。そこはラグビーをする場であり、見る場であり、集まる場であり、教える場であり、そのような場づくりをしたかったです。

中塚先生や山田先生のおかげで筑波大附属高校のグラウンドが使えるようになったので、筑波大附属小学校などに声をかけました。中学生以下でしたら何歳でもOKと募集をかけましたら、最初は小学3年生までが中心で20名程度でしたが徐々に増えていきました。基本的にラグビースクールはどこでも5つのカテゴリーに分けて運営しています。幼児クラスは年少から年中まで、低学年クラスは小1と小2、中学年クラスは小3と小4、高学年は小5と小6です。これに加えて中学生のクラスです。ラグビーは低学年(小1.2年生)はミニラグビーで5人制、中学年(小3-4年)で7

人制、高学年（小5, 6年生）で9人制となります。2015年には、ようやく最初の3年生が高学年になって幼児から6年生までのスクールの体制が整ってきました。一方で、人数が増えてくると、出席率が落ちてきました。現在の出席率は約7割です。登録者は180名程度なので、コンスタントに130-140名程度の参加者がおります。

次の課題はコーチの確保です。ラグビー練習はコーチの人数がサッカーに比較するとたくさん必要です。大体児童4-5名に1人のコーチが求められています。今は50名がコーチ登録しており、毎回35名前後のコーチ・スタッフがボランティアとして参加しています。

会費ですが、ラグビースクールでは月1,000円ほどの会費が主流です。当スクールは入会金はありませぬ。ですから年間参加して1,000円×12ヶ月=12,000円の年会費ですべて賄っています。日本ラグビー協会が所有している江東区の辰巳のグラウンドを使用することがありますが、使用料が1回2時間20,000円ですので、当初は赤字になりました。

先に述べたように通常の練習は、筑波大附属高校のグラウンドを借りて実施しています。加えて他校との交流会、東京都のミニラグビー大会 [春と秋]、女子の大会、小学生の全国大会のヒーローズカップなどあります。また7月には毎年長野県菅平まで2泊3日の合宿を実施しています。さまざまな体験をすることにより、ラグビーを通じて子供たちの成長を支援していければと考えています。

2018年度 年間スケジュール

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
練習	←----- 通常練習 / 合同練習 ----->												
大会	△神奈川県ガールズフェスティバル(4/28) △春季大会(5/5)					△秋季大会(11/3) △熊谷ガールズフェスティバル(11/24) △ヒーローズカップ(12/2 or 16)							
イベント	△辰巳BBQ(7/29)					△スタッフ懇親会(10/XX)					△親子大運動会 おしるこ大会 (1/x)		△納会 (3/xx)
運営	△拡大理事会(4/11)		△拡大理事会(8/7)			△拡大理事会(11/xx)			△拡大理事会 (2/XX)				
	△指導者研修会(5/24)		△指導者研修会(9/20)			△指導者研修(1/xx)			△保護者会(2/xx)				
	△保護者会(6/24)			←====→ 後期会費			←====→ 前期会費						
その他													

3. 文京ラグビースクールの運営

スクールの育成方針ですが、ラグビーの言葉として有名な ALL FOR ONE, ONE FOR ALL (一人はみんなのために、みんなはひとりのために) を大事にしたいと思っています。同時に児童や保護者に伝えたいのは、スポーツを楽しむ姿勢や習慣を持ってほしいということです。ラグビーというのは、集団スポーツなので、一人で頑張ることだけでなく、みんなのために頑張ること、我慢することも大事だということを伝えていきたいと思っています。その結果、ラグビースキルが向

上すればよいと考えています。いつも練習の前に子供たちに言っていることが4つあります。

1) 大きな声を出そう、2) ボールを大切にしよう、3) 約束をまもろう、4) あきらめずに頑張ろう。これらは、私が日頃から大事に思っていることです。大きな声をだすのはコミュニケーションの基本であり、自立した個人の基礎になります。ボールを大切にすることはラグビーの基本であるパスワークにもつながります。ラグビーのルールだけでなく、集団で行動するための約束を守ることは社会性の育成につながります。また子供たちは負けるとわかるとあきらめてしまいがちですが、どんな状況でも最後まで頑張ることが重要だということを伝えていきたいと考えています。勝利の結果よりも頑張ることが人間の成長につながると思うからです。

運営面では、創設時からのメンバー10人ほどで理事会を構成し、運営について話し合っ進めています。一昨年“一般社団法人”として法人化して、より社会性を備えた組織運営を目指しています。人数が多くなり、忙しい社会人が運営の中心なので出来るだけITツールを活用して効率化とスピード化を図っています。入会時の案内や申込書の入手もホームページからですし、練習等の連絡もすべてサークルウェアというwebのツールを通して行っています。しかし、同時に保護者とのコミュニケーションも大事なので、年2回ほど保護者会を実施して、保護者の意見も運営に反映するようにしています。

特筆すべきイベントである夏の菅平合宿(2泊3日)は今年も、総参加者151名(児童92名、スタッフ38名、保護者21名)の参加で実施しました。小学生1年生から6年生まで2泊3日の合宿を通して大きく成長する姿に接することは校長としても毎年嬉しく思っています。但しこの夏合宿を実施することはスタッフ一同の努力のたまものであり、コーチ・スタッフ、参加された保護者も含めた成長の場であるということを忘れてはなりません。夏合宿で他のスクールと違うことをあげれば、学習の時間を設けて毎朝30分勉強を行っているところです。ラグビー合宿でもいつでも勉強はおろそかにしない姿勢を身につけてもらいたいと思っています。

もうひとつの特筆すべきイベントは、ヒーローズカップ(小学生高学年の日本一のチャンピオンシップ)です。この大会は、同志社一神戸製鋼で日本代表であった林さんが関西を中心に始めて全国規模になっています。この大会への参加については、いろんな意見がありました。「小学校レベルで全国大会というのは無理がある。チャンピオンを目指すようになると勝利至上主義になりスクールの練習が勝つためのものになり基本の目的が損なわれてしまう。」などいろいろです。当スクールも当初は参加を見送ってききましたが、昨年参加を試験的にしました。チャンピオンシップのいい面である「目標を目指して頑張ること」は重要であると考えて、試行錯誤の中で今年も参加することにしています。

その他、幼稚園や、小学校や、中学校など、地域にラグビーを紹介するために、ラグビー体験教室を開いたりもしています。今年で3年目になりますが、文京区の千駄木幼稚園のラグビー教室を今年も文林中の校庭を使用して実施します。集団スポーツの良さをもっと広く体験してもらうようになればと考えています。

4. 今後の課題

今後の課題のひとつは、スタッフのレベルアップです。子どもが成長するためには、まずコーチがしっかりしないといけない。コーチが適切なスキルを持つことが大事です。そのためにさまざまな講習にも参加してもらっています。また人数面でも子供4名にコーチ1名くらいの割合でコーチが欲しいのでコーチの育成・募集が大きな課題です。ラグビーに限りませんが、子供たちの能力と可能性を見極める力がコーチになくてはなりません。できない子供たちには、その子供たちの可能性を信じて待つことが大切です。またどこまでゆくと怪我につながるのか、見極める力も必要です。安全マインドは全員が持っていなければなりません。現在コーチに5人のドクターがおり、怪我が発

生じた際の専門の病院との連携もしていますが、怪我が起こらないように、コーチの指導力育成が重要であると考えています。

昨年、事務局長の名方さんが英国のレスタータイガーズ（英国レスターにある英国トップクラスのラグビークラブ）を訪れ、現地の人と交流してきましたが、その中で、イギリスラグビー協会が“Tackle Learning”というアクティブラーニングの実践をしている情報を得ました。日本の教育界でもアクティブラーニングが流行していますが、そのもとになるようなワークがたくさんあることが分かりました。100ページほどのアクティビティーケースを見るとすぐに実施するには難しいものも多かったのですが、すぐにスクールの練習に導入できるものをありました。子供たちに、ラグビーを通じて人間としての基盤を作ってほしいとの思いがあるので、コーチの皆さんにアクティブラーニングの文京ラグビースクール版の開発に取り組んでもらっています。

私は、練習に来た子供たちの全員が、同じだけボールに触るチャンスがある練習が一番いい練習だと考えています。そういう意味では試合はいい練習ではありません。子供にとって達成感を味わわせてあげられる練習を主導するのがよいコーチですが、集団スポーツは自分が活躍しても負ける場合もあるわけで、そこから我慢することや、諦めないことの価値を学ぶので、安易に達成感を目指すものではないと考えています。

しかし現実的には、勝つことに固執しないことに賛同する保護者も存在する一方、スキル面で、もっと指導をしっかりとしてほしいという保護者の意見も存在します。頑張ってもできない子供というのは少なからず存在します。文京ラグビースクールとしては、ひとりひとりの実態に合わせて、個々の成長を大切にしたいと考えています。東大ラグビー部の監督をしているときに考えていた指導方針をベースにしてきましたが、それは「自分を育てられる選手を育てる」というものです。自分を育てるとは、自分がなりたいものを具体的にイメージする。それとのギャップをどう埋めるのか。自分が自分のコーチになり、必要な練習計画を立てて実践することです。文京ラグビースクールにいた子供たちが自らを成長させる力を持ってくれることを願っています。

これは永遠の課題でもありますが、今後も追求したいと思っています。

本日はご清聴ありがとうございます。(拍手)

嶋崎：齋藤さんありがとうございます。それでは質問をお受けしたいと思います。

5.. 質疑応答

Q：サッカーではクラブというのですが、スクールとクラブでは何が違うのですか？

齋藤：クラブは18歳以上が定義となっています。スクールは幼児から中学生までを対象にしています。

文京区の中学ではラグビー部のある学校はありません。

日本ラグビー協会の規定では二つのチームへの二重登録は認めていませんが、中学生はラグビースクールと中学校のラグビー部への二重登録は認められています。

Q：卒業したスクール生のラグビーの活動はどのようになっているのか？

齋藤：高校でラグビーを続けている子供もいますが、ラグビー部も高校にないので活躍できないのが現状です。

Q：ヒーローズカップについて疑問を持っていたことに賛同しました。サッカーもチャンピオンを選出する読売ランドの大会があったが、子供たちがゆがんでいるなと感じたことがあります。トップを目指すのは悪くないのですが、過剰に盛り上がったり、発達に応じてボールのサイズなどを

考慮されてなかったりしていました。

齋藤：本来の目的を見失わないことを大切にして、スクールとしての運営をしっかりしたいと考えています。日本のスポーツ界では、熱心なコーチが行き過ぎた指導をしてしまっていることが問題となっていますが、そうならないように注意しています。

Q：ラグビーをやるんだという考えだと、なかなか組織づくりを考えたりしないのですが、組織づくりをどうしようかよく考えられているようで、感心しました。

齋藤：責任ある形にしたかったので、組織づくりが重要と考えました。

Q：身内で始まっていたのに、子供も増え、コーチも増えてきた。コーチはどのような人たちなのか。

齋藤：保護者が多いです。いろいろところで声をかけてきました。保護者では無くて専門に教えている人というのは5人ほどです。あとは保護者です。危険をとまなうスポーツなので積極的に誘うとういことはしませんでした。コーチにしても、子供にしても、やりたいかどうか、が重要だと考えています。多くのコーチがロコミのような形で増えてきました。

Q：ケガの話で、タックルというのは危険でないのですか？

齋藤：来年から2年生以下はタックルなしとなります。外国でも小さい子はタックルなしにしています。

Q：保護者にこういうところを強調したいということはあるですか。

齋藤：ラグビーが好きになるように指導していることです。単純に楽しいだけではいけないし、叱ることも大切です。スクールに行くことがわくわくするところを目指したいです。ラグビーを教えるのではなくラグビーを通じて大切なことを教えることが大事であると思います。

Q：真夏など厳しい環境の時は、子供たちに対してどこまで責任をもってやっていくのですか？

齋藤：責任をもって指導するという観点では1学年を30名までにしようとしたことがありますが、制限してしまうと、自分たちの成長を止めてしまうのではないかと思い、今は制限を緩めています。

真夏ですが、子どもたちの暑さへの抵抗力をつけてあげたいと思いますし、こんなときにはどうしたらよいのかという工夫する姿勢を身につけてもらいたいと思っています。

誤解してもらいたくないですが、暑いときには休むのではなくて、暑さにどのように対処するのかをチャレンジさせたいと思います。その意味で今年も大変厳しい夏でしたが、休まず練習は行いました。

Q：ラグビーは男子のスポーツという気がするのですが、女子はどうなのですか？

齋藤：日本ラグビーは女子にも力をいれており、活躍もしていますが、文京ラグビースクールの女子の人数は減っています。女子を増やすには、タグラグビーなどのノータッチラグビーの導入などを考えています。

嶋崎：齋藤さんありがとうございます。最後に盛大な拍手をもう一度よろしくお願いします。